



Effects of Providing Known Associates on Intentional Vocabulary Learning: Comparing Synonyms, Co-hyponyms, and Lexical Collocations

著者	多田 豪
発行年	2020
その他のタイトル	関連語の提示による意図的語彙学習への効果：類義語、同類語、コロケーションの比較から
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9345号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160894

氏 名	多田 豪		
学 位 の 種 類	博士（言語学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 9 3 4 5 号		
学位授与年月日	令和2年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	Effects of Providing Known Associates on Intentional Vocabulary Learning: Comparing Synonyms, Co-hyponyms, and Lexical Collocations （関連語の提示による意図的語彙学習への効果：類義語、同類語、コロケーションの比較から）		
主 査	筑波大学	教 授	磐崎 弘貞
副 査	筑波大学	教 授	久保田 章
副 査	筑波大学	助 教	博士（言語学） 土方 裕子
副 査	東京電機大学	教 授	博士（教育学） 相澤 一美

論 文 の 要 旨

第1章では、研究背景として、英語学習には、何らかの言語タスクを通して語彙を学習する付随的語彙学習と、単語集などの語彙リストを用いる意図的語彙学習に大別され、両方の側面が不可欠とされていると指摘している。そこで、本研究では、短期的な語彙学習で効果が高いとされる意図的語彙学習に焦点をあてたこと、その中でも「既知語＋未知語」の形式で目標語を学習する場合の効果を研究したことが述べられている。

第2章では、関連する先行研究を以下のようにまとめている。英語の語彙を広げるには (a) 学習者が英語で言えないことに気づくこと (Swain, 1995)、(b) 知らない表現を学ぶ動機づけを高めること (Laufer & Hulstijn, 2001)、(c) 新たな知識を既存の知識と統合し、想起の手がかりを増やすこと (Stahl & Nagy, 2006) などの認知処理が有効であるとしている。よって、このような認知処理を実現できる有効な方法の1つとして、関連語を同時に覚える手法に焦点をあてた研究が多い。ただし、未知の関連語同士を同時に学習しようとすると、学習を阻害し逆効果に終わるという結果もしばしば報告されている (Erten & Tekin, 2008; Hoshino, 2010; Tinkham, 1997)。そのため、関連語を用いる場合は「既知語＋未知語」の組み合わせで学習する方が、様々な効果を期待できるとして推奨されている (Nation, 2000)。

第3章では、こうした先行研究を基に、意図的語彙学習の枠組みで既知の関連語を用いることによって、どのような学習効果を得ることができるかどうかを検証することの重要性が述べられている。その際、目標語の意味想起の測定に加え、語彙知識そのものへの効果を測定し、関連する意味の語とコロケーション関係（語と語の意味的・慣用的なつながり）にある語で、そうした効果を比較する研究が必要であると主張している。先行研究でも、既知の関連語を用いた英単語学習に関して、類義語とコロケーションの場合について効果が示さ

れてきた。コロケーションを用いた実験では、目標語の想起時に既知の関連語を提示した場合、目標語の想起が効果的に促されるという点が検証されている。しかしながら、この「既知語＋未知語」による学習方法の効果の全体像については研究が少なく、不明確な点が多数残っており、それを以下の４点に集約している。

第１に、類義語以外の意味的関連語にも目標語の学習促進効果はあるのかが不明瞭である。２点目として、目標語の意味以外の語彙知識への効果についても不明瞭な点が多い。３点目として、既知語が意味的関連語とコロケーションの場合において、両者の効果を比較した研究が少ない。４点目として、より具体的な学習条件－提示する既知語の数や関連度の高さ、学習時の意識の仕方など－で効果が変わる可能性についても検証が必要である。こうした点を検証するため、以下の４実験を行っている。

第４章の実験１では、類義語以外の「同類語」（同じカテゴリに属する語；例えば「犬」「猫」などは同じ「動物」のカテゴリに属する同類語）と呼ばれる意味的関連語を用いる場合について、その効果を検証している。日本人大学生を協力者として、既知の同類語を提示しつつ英単語を学習・想起する実験を行った。結果として、先行研究と同様の状況が得られ、想起時に既知の同類語を提示した方が高い点数となることが示された。

第５章の実験２では、既知の類義語を与え、先行研究ではほとんど扱われていない「目標語の意味の正確な理解」に対する効果も含めて検証している。日本人大学生を対象に、関連度の高さと既知の類義語の提示数も要因に入れて実験している。その結果、実験１と同様、想起時に既知の類義語を提示した方が高い点数となり、提示する類義語は「関連度の高いもの１つ」が最も効率的であることを示している。

第６章の実験３では、既知語が意味的関連語である同類語とコロケーションの場合で、両者の効果を比較している。日本人大学生を対象に、先行研究で検証の少ない「コロケーション知識」に対する効果も含めて検証している。その結果、目標語の意味の想起は同類語による促進効果が高く、コロケーション知識はコロケーション提示による促進効果がやはり高くなることが検証された。

第７章の実験４では、既知のコロケーションを用いる場合で、単に参照する場合と、目標語をコロケーションごと覚える場合で比較を行っている。その結果、目標語の意味の想起についても、コロケーションごと覚えるように指示した場合の方が学習の促進効果が高いことが示された。

第８章では、こうした実験結果を総合的に考察している。第１に、既知の関連語は、学習時に操示したものを想起時にも提示すれば、想起を促すことができることが示唆された。特に、実験３の結果からは、同じカテゴリに属する関連語の効果が高いことが示唆されている。第２に、コロケーション知識に関しては、既知語を含むコロケーションで学習するよう指示した方が高い効果を発揮した。よって、目標語のコロケーションに注意を向けたい場合は、「既知語＋未知語」のコロケーションの形で学習することが有効であると言える。３点目として、意味的関連の強さによる効果については、実験１から、関連の強い語の効果が高いことが示唆され、実験２の結果からも、関連の強い語の方が想起に有利であることが示されている。このことから、一般的に意味的関連の強い関連語を提示した方が学習効果は上がると考えられる。４点目として、提示する関連語の数も、関連の弱い語でない限り、１語で十分であることが示された。学習者の注意資源は限られているため、多くの関連語を与えられても記憶に残るほどの注意を向けられないと考えられる（Barcroft, 2002）。

第９章では、結論として英単語の学習時に関連語を用いる際には、同じカテゴリに属する既知語を意識させること、類義語を用意する場合は関連度の高いもの１語で効果が十分であること、コロケーション知識に注意を向けたい場合にはコロケーションごと覚えるよう指示すると効果的であるという教育的示唆が提示されている。

審 査 の 要 旨

1 批評

本研究は、語彙リスト等を用いて英語語彙を学習する意図的語彙学習に焦点をあて、その学習効果について、4つの実験を行い、以下の4点を明らかにした。

(1) 目標語と共通の上位語を持つ同類語を提示することで、学習効果が上がること。

(2) 目標語の同義となる語を提示した場合にも学習効果が上がるが、その場合、関連度が高いものを1語だけ提示するのが最も効果が高いこと。

(3) 同類語提示とコロケーション提示を比較した場合、意味想起には同類語提示の方が効果があるが、コロケーション自体の想起には、やはりコロケーション提示には効果があること。

(4) コロケーション提示は、単独で単語を覚えるより、意味想起においても効果があること。

上記結果について、実験1ではこれまで題材として使用されていなかった関連語の種類として同類語に着目し、その提示がリスト学習に効果があることを示した点は新しい知見と言える。実験2については、先行研究でも扱われてきた類義語について、意味的関連性と提示語数という新たな視点からアプローチし、学習には意味関連が強い語を1語だけ提示すれば十分であるという結果は、教育的示唆に富んでいる。実験3については、同類語とコロケーション提示の比較においては同類語提示の方が効果が高いものの、コロケーションの想起自体には、コロケーション提示が役立っている点は、教育的には見逃せない点と言える。実験4では、提示だけではなく「コロケーションごと覚える」という指示が効果があることがわかり、簡単な指示作業ではあるが、教室においても参考となる知見と言える。

このように、本研究は日本人英語学習者の意図的語彙学習について、実際の英語授業でも実践可能な手法で独自の実験を実行し、日本人学習者の語彙学習メカニズムを明らかにした点は高く評価できる。特に、語彙学習の問題点を指摘するだけでなく、それを改善する教師の指示方法を具体的に示唆できた点は有益である。

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。まず第1に、本研究で使われた語彙提示手法が、現在広く実践されている英語の発信活動にどのように組み込めるかの示唆が必要であろう。2点目として、本研究は意図的語彙学習に焦点をあてているが、付随的語彙学習との棲み分けについても研究を深めることが期待される。3点目として、目標語が低頻度語であり通常の段階的語彙学習とは異なっているので、さらに実地的な語彙学習文脈や目標語を用いて実験を行うことも必要であろう。4点目として、今後の実験においては、目標語の音節数、形態素の透明性なども考慮した統制も必要となるであろう。

こうした課題は、今後の研究で発展させることができるものである。本研究自体は、先行研究の知見を一步深めており、学習者にとっても、英語教員および教科書を含む英語教材編集者に対しても、語彙学習の手法、語彙の提示方法について有益な知見を提供し、英語教育の発展に十分に貢献するものと言える。

2 最終試験

令和2年1月23日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。